

『武道伝来記』の〈いやなかたぎ不好容儀〉

篠原進

「四月に出された『武道伝来記』じゃ、あまり感心しませんでした。人物が死んでます。先生はやっぱり町人もがええと思いました」(朝井まかて『阿蘭陀西鶴』¹)。

こう、うそぶく近松。小説上の虚構であるが、「武家物はつまらなかつた」(片岡良二)²、「凡作」(森銑三)³とあるごとく、あながち的外れというわけでもない。

—

なるほど、それらの批判はあくまでも、他の「西鶴作品中の一流品と較べ」(東明雅)⁴た場合であり、「敵討の動機、敵を討つまでの過程を丁寧を描いて、討つ人討たれる人の悩みや苦しみに筆を及ぼしてゐる」(野間光辰)⁵と弁護する向きもある。それでも、「一貫した魂の炸裂がない」(暉峻康隆)⁶といった批判は根強い。

そんな状況が一九六〇年代に一変する。六六年の八月、岩波

文庫から『武道伝来記』が上梓されたからだ。校注を担当した前田金五郎が新たに提示した二三種の典拠や素材。それを踏まえて前田は言う、「『武道伝来記』は」近世初期の敵討物語を綴る」歴史小説、モデル小説であると。

約二〇年後、ほぼ定説化した右の仮説に谷脇理史は真つ向から反論する。「『武道伝来記』の西鶴は、当世の武家社会を当世のこととして書くことをはばかり、時・所・人名を仮構し、(中略)意図的に虚構化して」おり、本書は「同時代の浮世を生きる武家の論理や心情を虚構によって具体化し、読者に浮世の一面を認識させる、文字通りの浮世草子、当世を描いた本」⁸であると。その成果は、岩波新古典文学大系『武道伝来記・他』の脚注(以下特に断らない限り谷脇説はこれに拠る)に凝縮されている。

歴史小説から現代小説へ、近世初期の敵討物語から当世の武家社会をうがつ社会小説へと、一変する評価。今から四〇年以上も前、五頁弱の小論文で中村幸彦はこう述べていた。「西鶴

は武士とその社会の中に「武士に限ったものではない」万人に共通した倫理を採求しようとした」のであり、「西鶴は武士の人間としてのあり方を」¹⁰、武士を通して人間、それもかくあるべく、かくあつてはならない人間を語ろうとしてゐるのだと。武士というガジェット（こんな用語を使うとまた中野三敏氏に叱られそうであるが、他に最適な言葉が浮かばないので当面は「装置」としておく）が照射する人間の存在の意味と本質。ただ、そうした仮説の正否も十分に議論されることがないまま現在に至っている。

ちなみに、「武道鑑」と「武道」とが混在する柱刻に着目して全体を「原武道伝来記」と「近代武道鑑」に分けた西島孜哉は二系列の差異を膨大な論文にまとめた。ただ、発表時期が近かったこともあり、谷脇説とかみ合うことはなかった。私自身も三〇年ほど前、「出頭者」¹¹に着目した仮説を述べたが、不完全燃焼に終った記憶がある。

もちろん、その一方で個別の各話については上質な作品論が備わっていることも忘れてはならない。その代表として佐々木昭夫の仕事がある。「武道伝来記」の三十二話は、それぞれがかなりちがっている」ので、「勝手読みの愚に陥ることを避けるためには一話ごとに細心の読みが必要」。こう断じた佐々木は、一九九八年三月から二〇〇三年三月まで『武道伝来記』中の一話一話をていねいに読み解き、次のような中間報告をしている。すなわち、巻二の二から巻三の三までの六話は「概して低調」。だが、「『武道伝来記』中には」少数の注意深い読者にだ

け読み取ってもらえばよい、そう考えたとしか考えられない箇所が時折目につく」¹²と。

一種の（ぬけ）。当代きつての読み巧者である佐々木を衝き動かしたのは何だったのだろうか。答えを保留したまま、道半ば（巻四まで）で逝ってしまった。それでも、ヒントが無いわけではない。『日本永代蔵』巻一の二「二代目に破る扇の風」について、こう評していたからだ。少し長いが、引用しておこう。

「人物の豹変を書くだけなら容易だ。それは奇談であり、むしろ説話の範疇に属する。そしてその場合も、読む者の好奇心はその人物の人間像に向けられ、やがて人間一般の不可思議を感じ取ることはできる。だがそれは、その変化を現実のものとして仮定し、仮定と承知の上で空想の翼を羽搏かせるに過ぎない。驚異の念は超自然の出来事に対するそれに等しい。ところが西鶴は、多くの場合単なる絵空事で済ませうとはしない。いかに大きな変化変貌でも、それが現実には生じ得るための諸条件を整え、ひとつひとつは現実的な偶然必然様々な事件を設け、変化する当の本人の意識・無意識の心理の深奥にそれが働きかける可能性を充分検討しては、控え目に表現する。だから読者は、奇蹟とも云うべき人物の大きな変化も、ひょっとしたら現実にはあり得ることではないかとの実感を持たざるを得ない。事は真の驚異となり、変化の落差は読者に人間性の深淵を一瞬かいま見させ、作品は、広く人間そのものが、様々な生の条件に規制され限界を劃されながらもなお秘めている可能性の大きさを啓示する。」

高度に専門的であればあるほど、一般性を持つという逆説。

特殊な世界の縦穴をどこまでも深く掘り進めて到達した底で、真理という横穴が繋がるのだ。西鶴の全作品を貫く、「人はばけもの」(『西鶴諸国はなし』序)という意識。変化と落差にリアリティを付与する絶妙な状況設定と、圧倒的な筆力。それは『武道伝来記』も例外ではないのである。

ともあれ、そうした作品論を介して三二の歯車(部品)の理解が深まったこととは裏腹に、『武道伝来記』という機械時計の動力源やスペックという本質はむしろ脆化し、谷脇の投じたボールは充分には受け止められていないというのが実状なのである。

二

だが今、再び中村、谷脇説が脚光を浴びつつある。近世軍書に造詣の深い井上泰至¹⁵はこう挑発する(以下便宜上論旨をA～Fに分ける)、A「近世刊行軍書を読んできた読者を前提とした時(中略)西鶴の武家物は、どう読まれるべきテキストであったのか」、「代表的な近世刊行軍書によって武家とはどうあるべき存在であるかという規範は、かなり醸成されてきていたのだが、そのことを前提にした西鶴武家物論は皆無」と。また前掲の中村論文が「『武道伝来記』執筆当時は」行動をもってそれを示す武士道から観念化し理念化してゆく過渡期にあった」と総括するのに左袒しながらも、その読みについては「武道」を中心に考えるべき」と反論。勇武を意味する「武道」は西鶴の時代も

地域によっては生きていたが、それを飼ひ慣らし官僚化に適応させてゆくよう変化していったと主張し、その根拠として「武道」の用例を次のごとく挙げる。

①「大事をおのおの伝受する事、是武道の第一なり」(『武道伝来記』卷三二の二)。

②「其ま切腹すべきこそ武道なれ」(同卷四の二)。

③「今時は武道はしらひでも、十露盤を置ならひ」(同卷四の三)。

④は狐をも服従させた梶田奥右衛門についてのもので、彼が伝授する「城取の大事」を井上は「軍略、すなわち「知」に傾いたそれ」と解釈。また、「武士の本意」は「勇武と情義の意味」と述べる。⑤は安倍川の遊廓で友人と口論し、彼を討つて逐電した青柳十蔵の述懐。これを井上は「勇」の意味」と解釈する。⑥は出頭者大壁源五左衛門を念頭においての世評。井上はその「武道」を「勇敢な戦う者の心得と一体化する剣術などの武術」と解釈した上で、B「『武道伝来記』における「武道」は「甲陽軍鑑」流の勇武に傾いた意味が中心」と結論付け、それが当代では「なかなか發揮しにくいとの認識が西鶴にあり」、「そうした武家の在り方への皮肉な視線」を「あたかも天理による応報であるかのように書くことで、当世武家批判と読まれることへの危険性を拭う意図があった」とする。

また、「勇武」の観点から広義の敵討」となっている例として小督の「女武道」(卷二の一)や民部の「死ぬべき時を守る勇武の精神」(卷五の三)を挙げ、『武道伝来記』はこれまでC「敵

「討」が主題であると論じられてきた」が「勇武の意味の「武道」が主題」なのだ^⑥と結論付ける。ただD「当代における武士にそのような生き方はできにくい現実を西鶴は冷ややかにみて」おり、E「禁令違反に準じる先腹」(巻一の二)を描くにあたっては「周到に」「信長時代に設定」することで、「出版条例に抵触する」危険性を避けた。F西鶴にシニカルな視点はあがあるが、「武道」そのものの価値を根底から疑問視する考えはな^⑦く、「武道伝来記」は、刊行軍書を通して一般化した、古き良き勇武の「武道」を称揚しつつ、それが当代では困難であることを説く立場にあると考えられ、そういう中世的武士のあり方が完全に変化を余儀なくされるこの時期の問題を、皮肉な視線で描くことで読み物となった作品」とする。

まずA。基本的には西鶴本の読者と軍書のそれは異質と考えるが、「武家階級を目当てに」(野間光辰¹⁵)執筆したと断定することはできないとしても、全く重ならないと言いつてもいい切ることでもない。それでも、「武道伝来記」は「武道」を中心に読むべき作品なのだろうか。そもそも西鶴が、「武道」を特別視していたとは思えないのだ。他の用例をみよう。

①「世間向きは武道を立、内証は出家ころに」(『諸国はなし』巻三の四)。

②「武道にすぐれての男」(『男色大鑑』巻一の三)。

③「武道にはあはざるたくみ」(同巻四の二)。

④「武道は、名におふ藤代の庄司がゆかり」(同巻六の五)。

⑤「古今武道、美道の詰聞き」(同巻六の五)。

⑥「武道を殊更にしこなして、尾上源太郎が替りに」(同巻七の三)。

⑦「中古武道の忠義、諸国に高名の敵うち」(『武道伝来記』序)。

⑧「衆道の情、武道のほまれ」(同巻三の二)。

⑨「水野何がしの流を汲の武道みがき」(同巻三の四)。

⑩「武道の油断をさせずして」(『武家義理物語』巻一の二)。

⑪「十三にて、武道も各別にまされば」(同巻二の四)。

⑫「目ごろは武道の男なれども、女にはよはき心ざし」(同巻六の三)。

⑬「うつにまさりし武道」(同巻六の三)。

⑭「武道の立合、人のすける役者」(『嵐無常物語』巻一の二)。

①は紫女に憑依される伊織。彼は形だけの「武士」。②は家老と口論して風の森に隠棲した橘十左衛門についての記述。皮肉なことに、その「勇武」は彼に長い浪人生活を余儀なくさせた。③は今村六之進の下僕万七が主人について述べた箇所。ここは「武士という身分」の意。④は大坂の歌舞伎役者で若衆方の鈴木平八についての評言。歌舞伎の役柄としての「武道方」と同義。⑤も同。⑥も大坂の若衆方・戸川早之丞についての評言で、同。⑦は議論のあるところであるが、単なる「武士」(谷脇¹⁷)の意とも考えられる。⑧は奥右衛門(前述)と二人で本懐を遂げた念友・大津兵之助らへの褒辞。これも「武士」の意か。⑨は津山で仕官を望む竹倉半蔵についての評言。旗本奴風の歪んだ「武道に励む者」に対し、西鶴はあまり好意的ではない。⑩は疱瘡で醜くなった自分を敢えて娶った明智十兵衛の「義

理」への応報として「城取」で貢献した姉娘の覚悟。ここは「武士の心得」というような意味か。⑪は子の伝之介を七尾八十郎に討たれた大代伝三郎の言。彼は八十郎を「武勇」に優れた者と讚美し、養子とする。⑫は再婚相手の男に殺された千塚藤五左衛門についての評判。これも右と同。⑬は父・藤五左衛門の敵・伝七の難病を救った藤五郎への評言で、「武士としての正しいあり方」の意。⑭は京都の立役・嵐三郎四郎への評言。ここは「武道方」と同義。

単なる「武士」の意から、歌舞伎の「武道方」まで多岐に亘る「武道」の用例。「勇武」を指すものがないわけではないが、意外に少ない。もちろん問題は量でないし、序文にも「中古、武道の忠義、諸国に高名の敵うち、其はたらき聞伝て」と記している。だが、⑦に記したごとくその「武道」は単なる「武士」ともとれるし、序文を額面通りに受け止めて「この作品は『武道』が主題」と断じて良いのか。というより、『武道、伝来記』と題する本に「武道」が描かれているのは当然であり、むしろ問われるべきは、そううそぶきながらも、それに回収し切れない話が取められていることの意味や、その「武道」の内実なのではないだろうか。

三

B C D Eは一緒に論じよう。まず、Bの前半部分とC。これについての反論は、前節で述べた。ただCで「従来は」「敵討」

が主題であると論じられてきた」と研究史を一括するのは正しくない。そう論ずる研究者がいることを否定はしないが、むしろ少数派なのではないだろうか。

DとEに異論はない。Bの後半部分とEは谷脇説との対峙を避けるかのような口吻が気になるが、それを否定しているようには思えない。

ともあれ、井上は「(武道を)「体」とするなら、「敵討」は「用」、すなわち「趣向」と断じFのごとく結論づけた。だが、木越俊介はそうした仮説と距離をおき、「武家を通してこそ端的に描くことのできる何か」を探る。すなわち、「武道や義理の表象を話の主旋律」と見る点は井上と同じであるが、その底には「言葉の呪術性と負の連鎖、コミュニケーションのすれ違い・から回りの様相」などの「通奏低音」があるとし、一例として巻五の四「火燵もありく四足の庭」を挙げる。それはこんな内容だ。

国を隔て白山を望む雪国のことである。四、五人の武士が、「化物の出る百物語」を始める(この部分『百物語』序文・万治二年に似る。九九話まで進み緊張も最高潮に達した折に、火燵の櫓が「霜枯の菊島にはしり出」るが、「武辺人にすぐれた」亭主の友枝為右衛門はそれを手鏟で突き刺す。花崎波右衛門、笠井和平、常盤滝右衛門、戸嶋与四左衛門は化物を仕留めたという証拠状に連判したものの、正体は飼犬と判明。その場は笑いで収まる。だが悪評が立ち、首謀者として篠村三九郎が疑われ、

双方三二人入り乱れての決闘となる。その結果、戸嶋、常盤、三九郎・林八郎父子ら一五人が死亡。逃亡した花崎と笠井は「鉢敲」に、友枝は太平記読みに身をやつして京都にかくれるが、林八郎の弟・三八と三九郎の甥・芝村湖助は故郷の訛りを手掛かりに花崎らを捕え、その自供に基づき友枝を討つ。

「間の悪い男・三九郎の「犬を突とめたる感状の事」(に言及した一件・引用者注)こそが、遅れてきた百話目」と断じた木越は、右の話をこう読み解く。「本話は、表向きには敵討の筋を素直に描きながら、同時進行的に、百物語の枠を話そのものに埋め込むことで、徹底して、言葉を発することが本来的に備える怖さを、複数の口承の発話形態に仮託して暗示的に描いた一編」と。

なるほど、「なまり声」から敵に気付く趣向は、言葉に関心を持つ俳諧師西鶴らし」という谷脇の脚注を敷衍した仮説は小気味よく、デス・コミュニケーションという新たな視点で該話は再評価されたとも言える。友枝以外の四人の口から洩れたとしか思えない、椿事の顛末。「土はたがひなり」といった意味不明の理屈で、友枝の居所を容易に明かす花崎と笠井など傍証もある。また「言葉を発すること」の「怖さ」とまで言い得るかはともかく、彼らの発言は概ね軽く、不用意な隻語が血で血を洗う大騒動を喚起した例も少なくない。だが、それが「武家を通してこそ端的に描くことのできる」ものなのだろうか。

一連の騒動がはしなくも照らし出す、今どきの武士の惨状。

悪い噂に冠せられた「今は、御代静謐に治り、血臭き事なきによつて」という、自嘲にも似たつぶやき。「天正三年(一五七五)」とするが、谷脇も指摘するごとく、それは紛れもない「太平の御代たる当世のこと」なのである。「血臭き事」がなくなり、存在意義を失った武士。絶望的なまでの結束力の弱さ。内輪の出来事を洩らすことはもとより、悪評が立つと連判したことも忘れ「為右衛門が武刃して、諸士の物笑ひになり、我々まで面目を失」つたと責任逃れをし、捕まると「我々も、彼者ゆへに社流浪いたせ。何をかつ、まん」と(結果的には)敵討に加担する救いようのない軽さ。

ここで想起したいのが、『西鶴諸国はなし』(巻一の三「大晦日はあはぬ算用」貞享二年)のことだ。消えた一両をめぐる一夜のドラマ。西鶴は該話を「彼是武士のつきあい各別ぞかし」と結んだ。それを褒辞と採るか、皮肉と読むかはともかく、七人の浪人の間には充分なコミュニケーションと結束力があつた。二年の懸隔は何を生んだのか。それについては後述する。

四

ところで、木越は谷脇説の画期性を認め、生類憐みの令に対する配慮を「首肯」する一方で、「当世の武士を諷する」という読みについては、「その人物の属性―たとえば主君、はたまた現実の武家そのもの―にまで敷衍して、西鶴が固有の対象を風(諷)刺しているという見方はとらない立場である」と述べ

ている。

予め「立場」を決めてテクストと対峙することの是非は措くとしても、武家を諷する意図があつたというエビデンスがあるわけではないし、「権力批判」や「政治批判」の意識は皆無⁽¹⁹⁾「中野三敏」という「前提」も間違いとは言いい切れない。ただ、如偏子の『可笑記』（寛永二十九年（一六四二）には半数近く（二説には二八〇章中二二〇ほど）もあつた政治批判や武家批判が西鶴時代に霧散したのかと言えば、それは違う。

一例をあげよう。たとえば本書の翌年、すなわち貞享五年四月の「序」を有する、洛下之野人撰『人倫糸屑』（深江屋太郎兵衛板。「木に桜あり、草に女郎花有。人に可愛風あれば、不好容儀あり」と断じ、其積の氣質物を先取りする鋭い人間観察の成果を「舌の掬にまかせて順斗の一曲をあつめて、其品を凶にあらはし。童子に是をあたへて嗜種となす。善も手本、悪も手本」（序）と提示したというユニークな書。ちなみに、書名の由来は「書林のなにし是になづけて。人倫糸屑といふ。其意は。もつれにけらしとるもとられずといふ」意味としている。

早くから古典文庫に収録されたこともあり、衆知の書であるが、絵入で羅列される「一曲」も二癖もある「不好容儀」の内実について、充分に議論されることはなかった。「妾狂、妾揚、逆臣、出来出頭、若衆上、輕薄者、佞人、臆病者、比興者、血氣勇者、潜上者、大氣者、小氣者、鹿相者、取売、似物師、悪銀遣、口方便、就付売、売僧、膈人、箆籬、肝煎、

太靴、徒女、盡費、淫乱、六法、片意地、高慢、短氣、自墮落、虚言、醉狂、城戸香、巾着剪」と現存本で確認できる三六種。全編に悪意がみなぎる、まぎれもない奇書。

注目すべきは、そこに挙げられた「不好容儀」が「出来出頭」はもとより、多くの点で『武道伝来記』の登場人物と重なることである。たとえば百物語の折に「天井に鼠の嗅ぐも、雷のおちかゝるか」と怖れた前述の五人。戰場とは無関係な場で戦慄する、今どきの武士たち。そうした人物を『人倫糸屑』は「侍は戰場にはせむかふを花見に行やうにいさみ。命をあさがらよりかろく思ふを一道とす」るにも拘わらず、「夏空の漸くもるともし雷がならふかと色をちがへ」、「みかけは男で内性の女におとりたる」と難ずる（「臆病者」）。

悪評が立つと一転して同座を悔み、愚痴をこぼす戸嶋。容易に友人（友枝）の居所を明かす笠井と花崎。そうした今どきの武士「容儀」については、「見かけは男にて口清く物いひちらし。武芸何におろかなくたちいりながら。肝心のこぐちにてちよろりとはづし。其くせに人一ばいの広言」（「比興者」という評言が合致する。続いて言う「主人の御恩ふかく蒙り主人死去の後は死手の御供は是非せいでかかなはぬ人と世上に指ざされて聞耳をたつるに。いかなく焼石に水はおろかな事しろりとしてのみくと知行をとつて罷ある。さても侍畜生めと。かどにらぐがきをせられ。豆腐の糟をまかれてもなんともなひはしやうとくの死ざらひ。是武士の比興者也」と。禁止を口実に殉

死を厭う今どきの武士に罵声を浴びせてもいる。

注目すべきは「やほな殿には必逆臣有とかや」（逆臣）とあるごとく、その主因を暗愚の主君に帰していることだ。たとえ「出来出頭」。「町人は分限者。侍は大名の内」にあり。大名召使の者にははなはだ懇切あつて先功の傍輩にこゆるを出来出頭といへり。尤其主君に「了智明白の人なれば。かれが器量を見出して。大事の節に益に立べき者と召出さるゝもあり。是は縦にあらず生得拔たる旦那殿人の善悪を見るまでの事は及なし。只時の興に乗じて御尤お道理と何事もそやしたて。或は酒宴色道にいたるまで皆々仰にまかせよいはづみにきをもたせ。えこらへぬしかけをするを。抜た殿これよき忠臣也と御秘蔵。やがて国すたれ家やぶるゝをもしらず」。「抜たる旦那殿」、「抜た殿」。木越の「立場」とは裏腹に、「不好容儀」への批判は必然的にその上部へと遡行する構造を有しているのだ。

本書について、リチャード・レインはこう解説する。「この作品では、半兵衛は、性と性交の範囲をのりこえて、人間のすべての弱点を包含するようなテーマに取りくむことになる。即ち妾狂ひ、逆臣、臆病者、似物師、高慢、巾着きりなど。この続編は明かに他の読者層をねらったもので、本来の購入者は、雇主であり（同年刊の西鶴の『日本永代蔵』のように）かれらの召使いや奉公人を訓戒するための警告書として利用したのかも知れない。しかし、この作品は前二作（引用者注・花洛銅駝坊三右衛門『好色訓蒙図彙』貞享三年、『好色具合』同四年）の有効な補助

作品であり、永い間、人間を悩ませてきた過失や弱点について元禄時代の人達も同格に困りぬいていたことを、みごとに描写している」。

挿絵担当の吉田半兵衛が著者と信じられていた時代の記述であるが、塩村耕は山雲子の手になるとして、こう述べている。「右三作は、小説的趣向を欠くものの、好色生活の種々相をよくうがって描写している。山雲子が浮世の観察者として優れた眼の持ち主であったことを物語っている。もっとも、そこに見られる立ち入った記述が耳学問だけで成ったとも考えられず、山雲子に相応の遊蕩生活を送った時期があったものと推察される。それは恐らく『人倫糸屑』の中でその苦しい内情が活写される「太鼓持」としてのものであったはずで、その舌耕者の要素が、これら好色本と嘸本の著述の中にかいま見える。この時期、山雲子と西鶴とは近い距離にあった」。

塩村によれば、山雲子の本名は坂内直頼で通称久右衛門。出家後は白慧と号した。正保三年（一六四六）、出石の生。寛永一〇年（一六三三）松江藩主堀尾氏に馬医として仕えた父・久右衛門は主家断絶のため浪人するが、慶安四年（一六五二）春、岡山藩池田家に仕官。だが翌年死去し、養子の善兵衛が家督を継ぐ。万治四年（一六六二）、善兵衛が狂を發し、山雲子（一六歳）が当主となるが、翌年、善兵衛が狂奔したために改易となり、母とともに上京。本屋の薦めもあり、延宝二年（一六七四）『頭書新抄 伊勢物語』、同八年『軽口大わらひ』、天和二年（一六八二）

『書札初心抄』『和歌詞林抄』、貞享二年（二六八五）『本朝諸社一覽』、元禄二年（二六八九）『浅井三代記』、正徳元年（七一〇）『山州名跡志』など多岐に亘る書物を上梓。元禄後半に浄土宗に帰依。晩年は伏見の欣浄寺に寓居。享保二年（一七一七）没。享年七二。

西鶴より四歳年少で同時代を生きたただけではなく、西鶴没後二四年も生き延び、吉宗時代の到来とともに没した山雲子。西鶴との接点は未詳。それでも『人倫糸屑』の板元深江屋は西鶴本も手がけているという点で無縁ではないし、幼時に池田光政時代の岡山に住したことは惟中との奇縁も感じさせる。

塩村は、その筆跡を手掛かりに山雲子が好色本を手掛けた可能性を探り、『好色訓蒙図彙』（貞享三年）については「人倫」として様々な職業層の好色生活を取り上げる趣向は、わずか三箇月後の同年六月に刊行された西鶴の『好色一代女』に明らか²⁴な影響を与えている」と述べる。近時は有力な傍証も提示され、その仮説は定着しつつある。

いずれにせよ、軍書のそれよりもこちらの読者の方が重なる部分が大いのではないだろうか。それでは「武家を通してこそ端的に描くことのできる」ものとは、何なのだろうか。少し時を遡らせてみよう。

五

暗転する運命。はじまりは、豊後に住む義姉が寄せた一通の

手紙にあった。些細なことで同僚と喧嘩になり、兄・判右衛門が殺されたというのだ。その兄に子がないこともあり、子の判八を連れて敵を追う判兵衛。江戸では使者役としての地歩を築き、立ち居振る舞いが家中の模範となるほどの栄達。だが、恵まれた地位も崩れるのは一瞬だった。「武士の身程定めがたき物はなし」。彼は妻を残して、但馬に向かう。敵の弥平次がいると仄聞したからだ。

しかし、殿の寵愛を受ける彼の屋敷は警護が厳重で、付け入る隙がない。やつとの思いで潜入するが、すぐに気付かれ逃亡することとなる。ところが、「老人の不自由さは」身躰が思うように動かない。壁の穴に首を差し入れ外に逃げようとすが、胴体がかえて抜け出ることが出来ないのだ。そうこうするうちに追手に両足をつかまれ、完全に身動きが取れなくなってしまう。何という醜態。これまでの境遇との大きな落差。

証拠隠滅のため、判兵衛の首をやむなく切って逃げる判八。失意の中で父の首を埋葬しようとした彼は、土中でもう一つの髑髏を発見した後、夢想を得る。今回の仕儀は弥平次の先祖を前世で八人も殺めたことへの報いなので、敵討ちを断念し出家せよと。警告を無視した判八は敵を狙い、返り討ちに遭うこととなる。

『西鶴諸国はなし』（巻三の七「因果のぬけ穴」貞享二年）の話である。副題の「敵打」が示唆することく、「諸国敵討」という角書を有する「武道伝来記」の先駆（野田壽雄²⁵）であること

は間違いない。それでは、そこに先取りされたものは何だったのだろうか。

「人物が死んでます」(朝井まかて)。右の話も含め『諸国はなし』中で武士の世界が描かれるのは六話(巻五の二「恋の出見世」の謎の「牢人」は措く)。通底するのは、激変する運命とそれに伴う血と死だ。小判紛失騒動のさなか、運悪く小判を所有していたために死のうとした武士(巻一の三「大晦日はあはぬ算用」)。盗賊を退けた際の血痕ゆえに投獄されながらも、弁解しなかった津河隼人(巻三の一「蚤の篋ぬけ」)。駆け落ち相手を殺されても、自害を拒んだ大名の姪(巻四の二「忍び扇の長哥」)。鍋墨の手形で凌辱犯たちをあぶり出した女と刺し違えて死んだ今川采女(巻五の四「闇の手がた」)。唯一の例外は紫女に憑依され危うく命をとりとめた伊織(巻三の四「紫女」)であるが、彼は形だけの「武士」であった(第二節①)。

「武士の身程定めがたき物はなし」。思えば『万の文反古』(巻三の三「代筆は浮世の闇」)の武士は、忘れた財布を横領されて死を選んだ。いざ事あれば今の安定した地位を捨て死ぬことも厭わない、死と隣り合わせに生きるすこぶる不安定な存在としての武士。「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」(村上春樹『フルウェイの森』上)。平穏な生活が何かを契機にカタストロフィに陥るといふ構造。日常の裂け目から垣間見える地獄。町人出身の西鶴にとつて、死が日常と背中合わせ(あるいは一部)に存在する武士の世界とは、まさに「各別」

違った異世界であった。『諸国はなし』の西鶴が武士に抱いていたイメージは右のようなものだったのではないだろうか。

「人はばけもの」(序)。化けざるを得ないギリギリの地点で、立ちすくむ武士。山雲子は武士のあるべき姿に照らして、それに背く人々を「糸屑」と罵倒したが、西鶴は「諸国はなし」から二年を経た『男色大鑑』(前半四巻)や『武道伝来記』で、「武家を通してこそ端的に描くことのできる」ものをどう剔出したのか。当面は後者にしほり、考えてみよう。

最適な一話がある。巻三の二「按摩とらする化物屋敷」は豊後、但馬という地名はもとより、多くの点で前掲の『西鶴諸国はなし』(巻三の七)と似た相貌を有している。すなわち、豊後の梶田奥右衛門は新参者ながら軍法に明るく、「当分三百石」を授かるが期待通りで、化物屋敷の古狸を退散させ、「(藩に)此人なくては」と不可欠な存在となる。だが崩れるのは一瞬だった。但馬の兄が戸塚宇左(右衛門に殺されたという報せ。戸塚を追いつ四国に向かう梶田。二年の時が流れる中で深い仲となった大津兵之介は今治で戸塚の左腕を斬り落とすが、左の首を失う。病床にあった梶田は鼓の伴奏を所望した折に兵之介の左手がないことを知り、但馬に逃げた戸塚を二人で討つという内容。

「最初完璧な人物が劇的事件の続出によって次第に人間味あふれる弱みを露呈してゆくという手法」²⁶⁾。兄の敵討に赴く恵まれたポストにある武士の、非業の死と敵討成就。結末は対照的

でも、「武士の身程定めがたき物はなし」という枠組みは変わらない。三倍ほどに増えた分量は、単なる「贅肉」なのか。たとえば章題にもある、化物退治。それは「突然奥右衛門にふりかかった兄の敵討という義務なるものが、化物退治などといかに異なった大変な仕事だったかを言おうとする」ためのレトリックに過ぎないのだろうか。

結論を先取りして言えば、『武道伝来記』の特質と魅力はむしろそうした「贅肉」部分にこそあるのだ。高潔で信義に満ちた武士と同じ数だけ、「人倫糸屑」が批判する「不好容儀」の武士たちが、さながら光と翳のごとくに剔出されている。逆臣、出来出頭、若衆上、あがり軽薄者、佞人、臆病者、比興者、血気勇者、潜上者、大気者、小気者、龜相者、六法、高慢、短気、自墮落。以下、該書のそうした側面を眺めよう。

六

周知のごとく、『武道伝来記』三二話の柱刻は次の三種に分かれる。(一)は「武道鑑」で八話。(二)が多く「武道」の一八話。(三)は両者が混合するもので六話。それが成立時期や構想の差を暗示するの可否かは分からないし、勝算があるわけでもないが、(一)、(二)、(三)の順に内容を確認する。

まず(一)。注目すべきは、『本朝桜陰比事』(たとえば巻二の一「十夜の半弓」元禄二年)を先取りしたときミステリー風の話が三つも有ることだ。華やかな場面を切り裂く殺人。『武道伝来記』

三二話中でとりわけ短い、巻四の四「踊の中の似世姿」。伊勢松坂の大踊りの折に殺された鳥羽田勘助。犯人が勝浦孫之丞と判明したのは、彼の暴力を憤る妾のリークからであった。彼女の密通相手と誤解し、勘助を闇討ちにする勝浦。勘助の弟・勘八は勝浦を討つ折に、誤ってその妾も殺すこととなる(袈裟御前説話を踏まえるとされている)。

ちなみに、被害者の勘助は今風の金貸し浪人だった。だが、西鶴はそうした脇筋に深入りせず、「六人組の風流男」の正体は女で、その中の一人が加害者の妾だったと伏線を回収する。同じことが肥前島原を舞台とした、巻四の二「誰捨子の仕合」にも言える。「泉州堺の、手前よろしき町人の娘をよびむかへ」て奢りを極める、辻岡角弥。浦の吟味役人だった彼は上意打ちと決まるが、刺客の矢切団平は「臆病者」で「比興者」。そのため任務を果たせなかった彼は、代行した榎崎茂右衛門を殺し、角弥の仕業に見せかける。加増された団平は奢り高ぶり、経緯を知る若党の九市郎を些細なことで処刑。恋人の久米は真相を榎崎の兄・茂左衛門に伝え、舌を食い切る。弟の敵討ちをすることは認められないので、茂左衛門は捨子を弟の子として敵を討つという内容。

密貿易を暗示させる(谷脇)角弥の行状。間違った恩賞で団平を增長させた暗愚の主君、弱みを握られた九市郎を意識下で怖れる団平の犯罪者心理。そうした長編化の芽を発芽させないまままで置き去りにし、「捨子の仕合せ」という章題に沿った話

が進むのである。

巻四の一「太夫格子に立名の男」は、章題を逸脱した後半部分に見せ場がある。安倍川の女郎町で口論し、青柳十蔵に討たれた榎坂専左衛門。弟・専兵衛は乞食の持つ羽織から犯人を突き止めるが、兄嫁に求愛し、殺される。彼女も自害。十蔵は病死。専左衛門の子・専太郎はその死体を討ち、出家することとなる。

「ひそかに、うき世ぐるひにみだれありき」、ぞめいた末の殺人事件。祝言をてきばきと取り仕切る「都そだち」の兄嫁を「出来心にて」「思ひ初おも」る義弟。敵討という極限状況が照らし出す人間の本质。美談の後ろに見えかくれする、今どきの武士の惨状。

他の五編には（「諸国はなし」で顕在化しなかった）垂直関係、すなわち権力の陰が漂う。まず『人倫糸屑』にも載る「出来出頭」。巻四の三「無分別は見越の木登」。肥後の豪邸に住む「出頭に暇なき」大壁源五左衛門は「十露盤を置ならひ」成り上がった経済官僚。彼の使用人が隣の「家久敷侍」安森戸左衛門宅を覗いたことで、境遇は一変する。「常々殿の権威をかりて、古座の諸士をながしるに」しているという積年の恨みが込められた銃弾。それを契機にはじまる争闘。谷脇が指摘するごとく、『浮世物語』にも先取りされた新旧武士の対立だが、決定的に違うのはその結末にある。どさくさの中で殺される源五左衛門。その子・小八郎は、母や叔父を迫剥ぎに殺されながらも安

森宅に奉公し、彼の家来（臆病者）を脅すなどして本懐を遂げるが、父の後ろ盾だった殿も亡くなり、「意趣をふくむの族」もあって逆に処刑されるという皮肉な結末。「敵討の空しさ」（谷脇）が主題か否かはともかく、今でも制度や組織に翻弄される人々が多いことを考えれば、古くて新しい問題でもあるのだ。

巻七の三「新田原藤太」は大百足を退治した沖浪大助に対し、鹿兒島の出来出頭・南江主膳が、「田原藤太」と「侍の道にかけたるわる口」を発したことが契機。主膳は斬られ、その子息・善太郎は巨大な百足の霊に導かれ大助の許に向かう。だが彼は既に亡く、その妻の出産を助け、不孝な子・大七を討つというちぐはぐな結末。

巻七の四「愁の中へ樽肴」は「籠相者」（『人倫糸屑』）が争闘の引き金となる。すなわち、参州の物頭役・小見山惣左衛門の若党・与四兵衛は婚葬の挨拶を逆にして怒りをかい、隣家の里鐘郷左衛門方へ逃げ込む。小見山は若党と里鐘を討ち切腹。小見山の子・専太郎は「二分立たず」、里鐘の子・弥七を追う。だが、従弟娘の求愛さえも退ける弥七の敵持ちとしての覚悟を知り、髻を切る。弥七も彼女と契った後に、専太郎のいる嵯峨に向かう。

巻七の二「若衆盛は宮城野の萩」は寛文一二年（一六七二）の「浄瑠璃坂の敵討」を結末部分に映すとされる。宮城野の萩山勝之介は殿（千海右衛門）に寵愛されるが、失恋を根に持つ葉田

川九郎治を返り討ちにして、後見役の田越弁左衛門方に逃げ込む。田越に依頼された勝之介を殿に仲介した家老・屋島十郎右衛門は主命を受け、勝之介を渡すよう迫るが叶わず、田越を討ち、外の浜に逃げる。勝之介は自害。田越の弟・弁蔵らは屋島を攻め、四五人が戦い、二七人が死ぬという内容だ。

七

ところで、屋島が殿に勝之介を紹介する場面はこう記されている。「右衛門、元来小姓御好なれば、よき次手を以て、其筋目たゞ敷く、美形なるよし申あぐるに、早速召出され、御寵愛かぎりなく。「小姓御好」の「右衛門」は主君の千海か、それとも家老の（十郎）右衛門なのだろうか。千海は「右衛門殿」と他の箇所では記され、十郎右衛門を「右衛門」と表記する例はない。どちらも該当しないのであるが、文脈的には主君と考えるのが自然であり、深読みすれば「小姓好き」の主君を曖昧化するための工夫とも考えられる。ちなみに、この千海は「仙台藩主伊達氏、又は同藩の自身の武家などの名をはばかり仮名としたものか」（谷脇）とされている。思えば騒動の主因は彼にあった。寵愛の反動として「憎しみふか」く、勝之介を逮捕するよう「気色かはりて仰付」た主君。その怒りの大きさが田越の不安を誘い、九郎治の横恋慕という真相を明かしたところで「旦那それを承引なされざる時は、勝之介が命はなき物」と引き渡しを拒んだためにこじれたのだった。

わがままな主君や上司。その横暴に翻弄される家臣。同じ構図が（群）の八話目、巻七の「我が命の早使」にもある。部下の妻に横恋慕した上司が、あろうことかその夫を殺そうとした話だ。日向の武士、磯部頼母は独身。「勇に色ふか」い彼は、家来の塚林権之右衛門に命じ、三河国吉田の伯父春川主計への書簡を届けさせる。手紙の内容に驚愕し、家中の動向を問う主計。だが、「御当代になりて諸国御簡略に付」（谷脇によれば、この部分は「綱吉」の治世が擬されているという）などと要領を得ない。主計に見せられた手紙で頼母が自分に濡れ衣を着せ殺そうとしたことを知った塚林は「人非畜生を、主共存ぜず」とそこを離れ、主計は成敗したと嘘の報告をする。それを知った塚林の妻は「侍畜生め」と頼母に斬りかかるが失敗し、なぶり殺しにされる。彼女の妹とその婿が頼母を討つが、自分たちも死ぬ。発心していた塚林がその菩提を弔うこととなる。

悪が顕在化しなかつた千海は無事で、悪意を露出させた「不好容儀」の頼母は「人皮畜生」、「侍畜生」という罵声を浴び、成敗された。

八

（三）群は柱刻に「武家鑑」と「武道」が混交する六話であるが、「不好容儀」の上司はここにもいる。ただ、結末は大きく違う。巻五の二「吟味は奥嶋の袴」は、こんな内容である。

身分違いの恋。昔は筑前で五百石を取った家柄とはいえ、今

は長崎老岐にて船の監視人を勤める村芝与十郎。彼の恋人は奉
行の子息で美貌の糸鹿梅之助であった。だが、「およそ此一道
におひては、高き賤しき隔なく、二人は「一命を抛て年月を
送」つていた。そんな折、若殿が梅之助に一目ぼれし、父の内
藏に彼を召し出すよう命令する。仮病を口実に固辞する梅之
助。困惑する若殿に経緯を聞いた近習の十倉新六は梅之助がそ
の昔自分の求愛を拒んでいたことを逆恨みし、与十郎との関係
を密告。若殿は与十郎を部下として抱え、成敗する悪計を企て
る。その手先となったのが新六の姨・野沢。女中頭を務める彼
女は女中部屋の下横目役となつていた与十郎の袴を盗み、それ
を忍び返しに残して闖入者に仕立てたのだ。即座に処刑される
与十郎。梅之助は「不義の科にかこつけて、今朝成敗」という
若殿の言葉ですべてを悟り、新六を殺して切腹する。

首謀者の若殿や野沢は無傷で、その手先となつた新六のみが
殺されるといふ後味の悪い結末。谷脇理史はこう述べている。
「近世における悪政批判の論理は、主君を聖域に置き、そのと
りまきの悪を難ずる場合が多いが、本章も一見その論理にの
り、新六のみが敵として討たれ、真の敵若殿は断罪されていな
い。それ故に後味が悪い感じもあるが、若殿の悪ぶりは本章中
に十分具体化されている。西鶴は、真の敵は誰かを読者に納得
させた上で、若殿への断罪を避け、直接的な政道批判とうけと
られないようカムフラージュを行っているのである」。

『男色大鑑』（巻二の二「傘持てもぬる、身」）で先取りされ、本話

を経て『武家義理物語』（巻一の三「死は同じ波枕とや」）へと繋が
る西鶴の表現構造。悪が成敗される(一)群のそれ(巻七の二)と、
後味の悪いままで終わる(三)群の該話。両者の前後関係や「カム
フラージュ」の問題は措くとしても、谷脇が指摘するごとく西
鶴は「真の敵」が分かる書き方をしており、釈然としない結末
が読者の想像力を刺激するという点で、開いたままで終わるこ
ちらの方がより巧みであると言えよう。

出頭者や上司、そうした権力の横暴を描くことはまた、時の
権力に羊のように従う武士たちの無気力さや情けなさを剔出す
ることと同義でもある。巻五の一「枕に残る薬違ひ」では大永
期(一五二―二八)の大和に時空を設定し、「好色一代女」のこ
とき女性が点描される。房事過多で高家の殿を衰弱死させた
姫。彼女の病いを「愚暗の玄芳」に診察させる、出頭家老坪岡
藏人。国家老森尾兵庫が連れてきた横川周益の見立てと違う
が、皆が「時の権威に恐れ」玄芳に従つたために姫は死亡。藏
人を返り討ちにした兵庫は、弟の虎七に討たれる。兵庫の子・
宮内は還俗して、虎七を討つ。

反復される出頭者の横暴。それを生む暗愚の主君。戦争がな
いといふことは、戦功という可視化された(誰もが納得できる)
評価基準が失われたことを意味する。それゆえ平時の統治者に
は部下の能力を見抜く明晰な頭脳と、公平な評価が不可欠なの
である。だが西鶴はそれに言及することはない。該話でも中国
の医書『素問』をもっともらしく引用して本質を暈しているの

だ。

以下は佐々木昭夫の「解」を援用しながら読もう。卷一の四「内儀の利発は替た姿」も出頭家老の横暴を描くが、章題のごとく、垂直関係から「ヨコ関係」（染谷智幸²⁰）へと重点が移されている。「諸事出来しだて」な金塚数馬を疎みながらも、「時の權威におそれて」従う家中。彼は大横目安川権之進が指図した能の番組の揭示法に何かと難癖を付け、口応えをした茶道坊主休林を抜き打ちにする。安川は数馬を討ち、「日来白眼あひて不念^{ふあひ}」な細井金太夫に敢えて妻子を預け逃走。金太夫は「武士の意気道理をたつる者は世間の見る目と各別」と身を賭して匿う。数馬一子・勝之丞は休林の倅・六十郎と相討ちとなり。安川、細井ともども名を上げることとなる。

「各別」異なる武士の論理。「二人の侍の精神の高潔さ」（佐々木³⁰）の引き立て役を担う「不好容儀」金塚。注目すべきは、「人倫糸屑」のそれがそのまま西鶴の「不好」になってはいないということである。たとえば、「六方（法）」（人倫糸屑）の登場する卷三の四「初茸狩は恋草の種」。津山の沼菅半之丞の美貌に魅かれた竹倉伴蔵は、彼が「町六方」能登屋藤内と深い仲であることを知り、藤内を脅迫。誤解した藤内は半之丞を斬ろうとして、逆に斬られる。藤内の弟・藤八は彼を敵と狙うが、半之丞は伴蔵の首を渡して切腹する。

「保守的侍たちと、上昇志向の藤内の町人の間にこそ」起くる「階級的摩擦」（佐々木³¹）か否かはともかく、「水野何がし（幡

随院長兵衛と対立した旗本奴の水野十郎左衛門か）の流を汲の武道みがき」の伴蔵には町六法と対立する旗本奴の面影が重ねられているのは確かとしても、「六法」そのものが批判の対象となっているわけではないのである。

卷一の三「噂略といふ俄正月」は、天正のころの陸奥若松。鹿島の事触れを見物に来た宮越十左衛門（百五十石）の二男亀松。彼に「袖につきのあたりたりし帷子を着ても、歴々のお侍」と罵声を浴びせる岩国善太夫（三千石）の子・善太郎の下男。善太夫の発語を遮り、「その断りおそし」と斬り殺す亀松兄・十太郎。彼は逃走先の京都で一族に切腹令が出たことを知り、六条三筋町の太夫・花の宴と訣別して切腹。遊女は追腹を切り、跡目を継いだ善太郎と亀松は成人後に斬り結んで死ぬ。

「太夫の恋と殉死が書かれたため、十太郎の行動と悲劇的運命が代表する武士の倫理は決定的に相対化されてしまった」（佐々木³²）とあるごとく、主筋と脇筋の境界が曖昧な一話。下級武士の意地と尊厳を賭けた十太郎の行為も、衆道関係にあった僧の寺に駆け込む件りや遊女との交感といった脇筋へと増殖する物語の中に埋没してしまうのである。その典型として卷一の二「毒薬は箱入の命」がある。

福島橋山の橋山刑部は皆に慕われる「特異」な出頭。だが妻を亡くした後、腰元の野沢への求愛が叶わなかったことで状況は一変する。心の隙に付け込む小梅。だが、「我になり」「心入のあしき事あらはれ」、彼の心は野沢に傾く。それを恨んだ小梅の

毒殺事件の被害者となった七人。函中の小梅に釘を打つ遺族。だが、「かへらぬむかしと、うたぬもあ」ったという。姉の敵討に失敗し、子の市丸を人質として蔵にたてこもった小梅の弟・九蔵。それを撃つ後藤森之丞。その折の傷を契機に念友関係となった二人は、森之丞の兄の敵を討つ。

騒動の主因は私的な事情でガバナンスを失った刑部にあるのだが、「辛うじてそのような疑念が沸くことがおさえられている」(佐々木³⁵)というのは正確ではない。疑念を持つ余裕を読者に与えないのだ。小梅を増長させた刑部の暗愚ぶり。それも、増殖するはなしの連句的ダイナミズムの中に埋没してしまふ。立ちどまらない西鶴。だが、そのことは自分が剔出した世界に無自覚だったということの意味しない。

九

柱に「武道」と刻すのは、一八話(佐々木昭夫が「低調」と評した六話はすべてここに含まれる。巻三の二については既述。既に指摘のあるごとく、その半数が広言悪口、仲人口に発するトラブル。「言葉が発することが本来的に備える怖さ」(木越俊介・前掲)を描いたという巻五の四「火燧もありく四足の庭」については既に触れたので、巻一の「心底を弾琵琶の海」から考えよう。「武士は人の鑑山、くもらぬ御代は久かたの松の春」。「いかにも全三十二話の成す膨大な一篇の冒頭に置かれるにふさわしい」(佐々木³⁶)起筆を持つ本話は、眼夢に仕える森坂采女と秋津

左京の話。殉死を禁じられた二人は、先腹を切る。眼夢は自分の思いが届かなかったことを嘆き、衰弱死する。主従の思いやりに満ちた姿と、魂の呼応。西鶴は緊張に満ちた完璧な世界に亀裂を入れる。「人程心のおそろしき物はなし」。失恋を逆恨みした閨屋為右衛門が、左京は命を惜しんだという根も葉もない「悪名」を言い触らすのだ。采女の弟・求馬が彼を討ち、左京弟・左膳は閨屋の子・次郎九郎を討つこととなる。

完成された世界を揺さぶり、美談を嗤う「不好容儀」。そんな対照的な人物を描出する話が冒頭に配置されていることは、『武道伝来記』の性格を考える上で示唆深い。思えば、正体が犬と判明するまでは、友枝の槍術も英雄的行為だった(巻五の四)。巻二の四「命とらる、人魚の海」は人魚を射た松前の奉行役人・中堂金内の話だ。「世に化物なし、不思議なし」と人魚の存在を疑う青崎百右衛門。「広き世界を三百石の屋敷のうちに見らるる故」と反論する大横目の野田武蔵。青崎の論理にも一理あるが、「不好容儀」たる所以はそれが金内の娘に失恋した恨みに発した不純なものだったからだ。失意のうちに亡くなる金内。彼の娘と妻が青崎を討った後に、矢の刺さった人魚の死骸が浮上する。

巻三の三「大蛇も世に有る人が見た様」^{たふし}の場合は大蛇。宇和島の石目弾左衛門がそれを斥けるが、同座した成川専蔵、木村土左衛門の臆病ぶりが話題となる。悪評をたてた久米田新平を成川の子息・滝之助が狙い、関係者も交えて死ぬという内容で、

石目の「武勇」は置きざりにされてしまっている。

卷三の一「人指ゆびが三百石」も悪口が契機。庄内の徳岡伊織は一八の時、人差し指を食いちぎられながらも殺人犯を逮捕。その英雄的行為が七三歳で認められ、三百石の加増をうけ六百石となる。「十本切ば三千石」と「あざけ」る藤村佐太右衛門。伊織の養子亀石仁七郎の念友・駒谷木工左衛門が咎め、藤村と決闘するが討たれる。仁七郎は小道具売りに身をやつし、宮津で中将棋をめぐつて決闘する藤村とその相手を討つことになる。後半部分の密度が薄く、「低調」（佐々木昭夫）な一話であることは間違いないが、手柄を認められないままで五五年もの長い間「初知行三百石」に甘んじてきた伊織の立場で見れば別の側面も見えてくる（『新可笑記』巻五の二「見れば正銘にあらず」にも「三百石」に甘んじてきた「天性よき侍」が主筋の外側に点描されていた）。それは主君や上司の恣意的で曖昧な評価基準に生殺与奪の権を握られた、武士の足場の脆弱さだ。

一〇

卷六の三「毒酒を請太刀の身」も臆病者、比興者といった「不好容儀」の話。飛騨の国主が家臣に得意な武芸を申告させた折、熊井五助のそれが多いことを外山白右衛門、坂野用助、乙見滝之進が揶揄。五助は実力を証明した後、三人に状を付ける。それに臆したことが噂となり、三人は五助を毒殺。だが、雷を怖がる滝之進を嚇つたことから仲間割れし、彼は殺される。滝之

進の子・角之丞は門話ひに身をやつした二人を討つ。角之丞と闘う折に五助の子・五七郎の刀の目釘が外れるが、角之丞の母は五七郎が入浴中だった息子を襲わなかったことへの返礼として、待たせる。そのため角之丞は討たれ、母は尼となる。

「不好容儀」の滝之進に對置される、子息と妻の美談。荒木又右衛門らの敵討を後半部に取り入れたとされる卷八の四「行水でしる、人の身の程」も風呂が舞台となる。「なまぬるき世中」ゆえ、那須殺生石の毒で落ちた鳥をも「命惜からず」と「あばれ喰」する若者たち。それにくみしなかった熊川茂七郎を揶揄した、高砂丹兵衛。争闘となり、殺された茂七郎の一人・茂三郎と伯父・茂左衛門は猿沢池前の宿での入浴中に手がかりをつかみ、「利の劔」で討つという内容。

卷二の二「見ぬ人兒に宵の無分別」はいかにも当世的な仲人口の話。肥後の女針立・妙春は善連寺外記の妹で醜女のおたねと福岡軍平を仲介。怒る軍平を「今の世の中は、かうした事が勝手づく」と二百両の持参金を見せる妙春。だが破談となり、おたねは自害。駆けつけた外記と妙春を斬り、軍平は逐電。熊野で和田林八と外記の弟八九郎が口論し、斬り合うところに外記の幽霊が出現。経緯を聞いた八九郎は軍平を討つが、林八は死ぬ。「勇武」とはほど遠い、どこか間の抜けた話。

もちろん、(二)の一八話中にも横暴な「出頭」の話はある。小田原で「出頭若ざかりの男」松枝清五郎は弓大将水際岸右衛門の一人・岸之助と深い仲。意向に背き岸之助が元服したことを

怒り、彼を殺すが、自分も殺される(巻八の二「惜や前髪箱根山風」)。一方、巻八の三「幡州の浦浪皆帰打」は先約があった名馬を、小湊井右衛門から横取りしようとした「出来出頭」構木工弥の話。決闘となり、斬られた木工弥の子息・孫七や娘は敵討ちに向かう。だが、貧しさの中で娘の家族は無理心中。孫七も返り討ちとなる。

横暴な出頭者の死。だが、後者の焦点は残された出頭者の家族にある。西鶴は「利の劔」を持たない彼らの敵討を成就させようとはしない。横溢する徒勞感。「咲をうれしがらねば、散に歎きなし」。こんな醒めた起筆を持つ巻六の一「女の作れる男文字」の随夢は岡崎の楽隠居で、一七歳の一橋を寵愛する古希の老人。それを妬んだ薄雲は男文字での手紙を偽装。怒った随夢は一橋を丸裸にし、首をはねる。「此一念、外にはゆかじ」という怨念。だが西鶴はこれを幽霊譚(「懷視」巻三の五「誰かは住し荒屋敷」など)ではなく、敵討話とする。すなわち一橋の妹・小吟は夫を残して随夢の家に奉公し、彼を殺して自害。薄雲も成敗される。

右は同じ家に奉公する女同士の感情のもつれが契機となつていたが、巻八の一「野机の煙くらべ」は「若衆上」(「人倫糸屑」)ならぬ、「(福知山の)大殿の御物あがり」だった国見求馬と猪谷久四郎の確執。焼香の順序を争った久四郎が転倒。それを求馬の家に笑われたと思つた彼は、求馬を討つて逃走。求馬の子・龍之助と虎之助が敵を追うが、虎之助は一人の女性と親し

くなる。彼女は久四郎宅に奉公して敵討の手引きをするもの、敵の子を身籠り、葛藤した末に子を殺し自害。竜之助は国元へ、虎之助は比叡山で出家する。

恋人が狙う敵の子を身籠つた女性の苦惱。巻六の四「碓引べき垣生の琴」の場合は「武士の習ひ程、世に定めなき物なし」と、心ならずも殺すこととなつてしまった相手の子と念友関係になつた男の話だ。越の国、大小姓役の赤西専八は主命で出崎新五平を討つ。だが後に浪人し、出崎の子・庄之介と念友関係となる。母が「仮の兄弟の契約したればとて、誠の親に思ひかゆる事が、侍の道か」と嘆いたために、二人は心中。母も死ぬ。

「武士の身程定めがたき物はなし」(「西鶴諸国はなし」巻三の七)とあるごとく、激変する人生。運命の皮肉。巻六の二「神木の咎めは弓矢八幡」も事件関係者同士の恋情を扱うが、主筋には絡まない。出石の若侍・葉田与七郎は半弓を自慢し、大石半九郎を誤射。同道した久志小左衛門は与七郎を斬るが、小伴新四郎に殺される。新四郎の娘に魅かれる、大石の子息・半三郎ら被害者の関係者。新四郎も含めて四人が争い、全員が死ぬこととなる。巻二の一「思ひ入吹く女尺八」は広島を舞台に、鞠を拾つたことから始まる初恋の様子が描写される。恋人同士となり、鳥川村之助の子を身籠る小督。だが小督の父が甥・甚平との縁談を強引に進めたことで悲劇が訪れる。村之助の存在を知つた甚平が彼を斬つて逃げたため、小督は「女ながら尺八を

吹習ひ、女尺八姿で子の村丸と、村之助の念友で「安芸の詞つき有」大谷勘内とで敵を討つことになる。

一方、巻二の三「身軀破る落書の団」では婚姻という華やかな場が一転して、悲劇の舞台となる。徳島、篠原文助の結婚を祝し、若者たちは落書の団で水浴びせをする。違法なそれを上司は穏便に済ませようとするが、怒った文助は従弟の千塚林兵衛の仕儀と誤解して殺す。真犯人（杉森新蔵）は大坂で客死。「うき世に、武士の妻女程定めなきものはなし」。林兵衛の妻は子・林太郎を擁し文助を狙うが、彼は進んで討たれる。文助後家は林兵衛後家に夫の敵と斬りかかる。しかし、彼女に説得され、「義理に責られ、身の浅ましき思い立」と、林太郎も含め三人は仏道に入る。

一

そして、巻五の三「不断心懸の早馬」では「乗打」に焦点をあて、「武家を通してこそ端的に描くことのできる」一話を提示する。佐渡の椿井民部（三千石）と綱嶋判右衛門（三百石）は鏡を外した外さないで争うが、殿の仲裁も奏功せず、藩を出た民部は剃髪し浅草辺に住むこととなる。彼は「義理の預り物」の境遇ゆえ、自宅近くで勃発した敵討の助太刀も妻に任せ、ひたすら（巻七の四の弥七のごとく）決闘相手の到着を待つ。そこへ、判右衛門が家族を伴って訪れ、子同士の娶わせることを約束。そして「武士の義理程、是非なき物はなし」と酒を酌み交わし、

斬り合つて死ぬこととなる。

もはやここに「不好容儀」はいない。西鶴はわざわざ「縁のかるきを見くだす心底にあらねば」と老人役に述べさせ、身分差（巻一の三）が争いの根底にあったわけではないと釘を刺してもいるのだ。それでも生じた確執。「民部礼義あつたにもせよ、此方の聞ぬからは、是非もなき仕合」。「鏡をはづし、謙退の辞を正しく懸申つれ共、今更、此断は申さぬなり」。もはや宿命としか言いようのないデス・コミュニケーション。

谷脇理史は言う、「西鶴に皮肉な口ぶりはないが、一見瑣末なことにこだわって死を賭する武家の論理や行為のあり方を強烈に印象づける一章」（一五六頁）と。だが「多くの物がたい武士にとつて、乗打は決して些細なことではなかった」と反論のあるごとく、「瑣末」か否かは人によって違うのだ。

多くの者たちが生身の小梅に大釘を打つ中、そうしなかった少数者がいたこと（巻一の二）を思い出したい。さまざま価値観。西鶴はその多様性を許容し、山雲子のように「不好容儀」と単純に斥けることはしなかった。

暗愚でわがままな主君や上司、出来出頭、抱え主、そして「敵討」という制度。そうしたものに翻弄される人を中心とし、犯人捜しの趣向を加味するなど、話の長短も含めバラエティに富んだ（一）群。権力者やその取り巻きなど、（二）に提示された「不好容儀」を追い、饒舌かつ自在にはなしを増殖させた（三）群。広言、悪口、仲人口など発語に関するトラブルがもたらす事件と、「そ

の後」を描く(二)群。

「武家を通してこそ端的に描くことのできる」ものを目指し、『武道伝来記』を手掛けた西鶴。当初の武家に対するイメージは、『西鶴諸国はなし』のそれに近かったのかも知れない。だが、結果は大きく違うものとなった。冒頭の一話(巻二の二)に典型化された全体の透視図は、常住「死」と対峙する高潔な武士と同じ数だけ「不好容儀」も存在するということである。「勇武の意味の「武道」(井上泰至)の裏に蓄光されたそれは、ブラックライトをかざすと浮かび出るような仕掛けとなっている。江戸川乱歩「D坂の殺人事件」のひそみに倣えば、白と黒のストライプ模様の着物。格子戸というバイアスを前提としてどちらに重点をおいて見るかは、読者に任されているのだ。

以上、「勝手に読みの愚」をさらしてみた次第である。

注

- (1) 朝井まかて『阿蘭陀西鶴』(新潮社・二〇一四年)。
- (2) 片岡良一『井原西鶴』(至文堂・一九二六年)。
- (3) 森統三「所謂西鶴作浮世草子の半数は他作なり」(『西鶴研究』三・一九五〇年一〇月)。
- (4) 東明雅『西鶴研究』四(一九五一年一〇月)。
- (5) 野間光辰『西鶴新新放』(岩波書店・一九八一年)。
- (6) 暉峻康隆『西鶴―評論と研究』上(中央公論社・一九四八年)。
- (7) 前田金五郎『武道伝来記』の事実と創作」(『文学』一九六六

年七月)。

- (8) 谷脇理史「『武道伝来記』論序説―読みの姿勢をめぐる―」(『文学』一九八三年八月)。
- (9) 谷脇理史「『武道伝来記・他』(新古典文学大系・岩波書店・一九八九年)。
- (10) 中村幸彦『西鶴文学における武家』(国文学 解釈と教材の研究 一九五七年六月)。
- (11) 中村幸彦『中村幸彦著述集』第四卷(中央公論社・一九八七年)に融合されている。
- (12) 西島孜哉「『武道伝来記』の成立について」(日本近世文学学会春季大会・一九八三年六月二五日)。同「『武道伝来記』論」(『武庫川女子大学紀要』三一・一九八四年)。「西鶴と浮世草子」桜楓社・一九八九年・所収)。
- (13) 拙稿「『武道伝来記』論―〈悪〉の造型と悲劇的世界の形成―」(『弘前学院大学紀要』二〇・一九八四年三月)。
- (14) 佐々木昭夫「近世小説を読む―西鶴と秋成―」第四章「武道伝来記」論(翰林書房・二〇一四年。初出は「『武道伝来記』論―巻一の構成―」『東京家政学院筑波女子大学紀要』二・一九九八年三月)。
- (15) 井上泰至「近世刊行軍書論」第五節「西鶴武家物と刊行軍書―『武道伝来記』への一視覚」(笠間書院・二〇一四年)。
- (16) 野間光辰・注5と同。
- (17) 谷脇理史・注9と同。

- (18) 木越俊介「『武道伝来記』『武家義理物語』西鶴武家物・解法の「ころみ」井上泰至・田中康二編『江戸文学を選び直す』笠間書院・二〇一四年)。
- (19) 中野三敏「西鶴戯作者説再考―江戸の眼と現代の眼の持つ意味―」〔『文学』第一五巻・第一号。二〇一四年一、二月)。
- (20) 野間光辰・解説『人倫糸屑』(古典文庫 第八四冊・一九五四年)。
- (21) リチャード・レイン『元禄のエロスV 半兵衛／七郎兵衛―上方名品艶木集』解説(画文堂・一九七九年)。
- (22) 塩村耕「西鶴時代の隠者作家山雲子の新たに判明した著述」〔『日本古書通信』九六三・二〇〇九年一〇月)。
- (23) 内閣文庫本(二種)の刊記は「元禄二己巳歳正月吉辰 江戸富野治右衛門寿梓。序文には「題『浅井軍記』首」として「浅井軍記。江州浅井氏家乗々文アガアガ約ツマヤカニトバシ辞達サイダツ。旌別スセイベツニ淑慝ヲシユクテイヲ。貞亨戊辰之秋 山雲子印(陽刻)「山雲子」(陰刻)」。その中で彼は家康の活躍ぶりをこう賛している。「天魔破句かおそひ来るともと存る間御安くおほしめされ候へとあさ笑てぞ立ける」(一四「信長卿横山の城を攻給ふ事附家康卿加勢をこはる、事」、家康は朝倉を「蜘蛛の子をちらす如く」追い散らし「家康卿の横槌暫時の間をそかりせは信長卿を討取へきものをと今に至る迄人皆申あひにけり」(一五「姉川の合戦の事」)。
- (24) 陳碧秀「山雲子の著作について」〔『近世文藝』九九号・二〇一四年一月)。「山雲子と遊女評判記」〔お茶の水女子大学人間文化創世科学論叢』一六・二〇一三年)。
- (25) 野田壽雄『日本近世小説史 井原西鶴篇』(勉誠社・一九九〇年)。
- (26) 佐々木昭夫・注14と同(三〇二頁)。
- (27) 同右(二九九頁)。
- (28) 同右。
- (29) 染谷智幸『西鶴小説論 対照的構造と〈東アジア〉への視界』(翰林書房・二〇〇五年)。
- (30) 佐々木昭夫・注14と同(二五一頁)。
- (31) 同右(三二二頁)。
- (32) 同右(二四七頁)。
- (33) 大久保順子「出頭」をめぐる表現―西鶴武家物と「談理」の性質に関して―『香椎湯』五八・二〇一二・一二月。
- (34) 佐々木昭夫(二四二頁)。
- (35) 同右(二二八頁)。
- (36) 高橋圭一『武道伝来記』私論―巻五―三「不断に心懸の早馬」〔『大谷女子大國文』二八・一九九八年三月)。
- (しのはら・すすむ／本学教授)